作る、すべてみな雪にて作りたつる也、雪をくぼめぬかをしきて、火をたくにきゆる事なし、これを雪堂又城ともいふ、兒曹右の雪堂の内にあつまり、物など煑て神にもさゝげ、みなよりてうちくふ、又間にへだてを作りたるは、となりの家に准へ、さま〳〵の事をなしてたはむれ遊ぶ、あそび倦ば、斯作りたるを打こぼつをもあそびとし、又他の童のこれにちかく、おなじさまに作りたるを、城をおとすなどいひて、うちくるふもあり、そのまゝにおくもあり、おのれ牧之も童のころは、かゝるあそびの大將をもせしが、むなしく犬馬の齡を歷て今は夢のやう也けり、

〔嬉遊笑覽六下〕東京夢華錄、十二月の條に、此月雖無節序、而豪貴之家遇雪卽開筵、塑雪獅裝雪燈以會親舊、この灯籠はいかやうに作るにかあらむ、今わらんべの作るは、雪を丸くつくねて、石灯籠の火ぶくろの如く、横に穴をほり、灯心のふときを一筋油に漬し、中に入て火を點せば、よくともる、もし灯心多く火のつよければ、雪解て火ともらぬなり、

〔北邊隨筆四〕雪墮指　史記匈奴傳云、會冬大寒雨雪、卒之墮指者十二三、於是冒頓佯敗走誘漢兵云云、こゝにても北越の雪中に日を經たりしもの、足くび腐れおちたるをまのあたりみたりき、されどさる寒地になれたる人はさる事もなく、かつ其防もたくみなるべし、よそよりおもはんがごとくならば、ひと日もそこには住むものあるまじきなり、松前の人京にのぼりたりしが、しはすの比かの國にて三四月ばかりの肌もちなりといひし、されどかく暑寒順なる地にすめるをもよろこばぬ事、たゞわれひとりしかるにはあらじか、

〔太平記十七〕北國下向勢凍死事

同十一日〇延元元年十月ニ、義貞朝臣七千餘騎ニテ、鹽津海津ニ著給フ、七里半ノ山中ヲバ、越前ノ守護尾張守高經、大勢ニテ差塞タリト聞ヘシカバ、是ヨリ道ヲ替テ、木目峠ヲゾ越給ヒケル、北國ノ習ニ、十月ノ初ヨリ、高キ峯々ニ雪降テ、麓ノ時雨止時ナシ、今年ハ例ヨリモ陰寒早クシテ、風紛ニ降